復讐

月氷奇縁

五

へ13
3103
5止

へ 3103
巻 5

昭和九年七月二三日 購求

月氷奇縁巻之五目録

第九回

壯士聴詩謝恩
孝子占夢復讐

第十回

陰陽和合熊谷坡
剣鏡奇遇馬籠巓

第五篇
武州熊谷寺

撥弋飛錫徳
無量二百年
来選佛場可
羨古坡黄葉
樹石泉流出
草花香

月氷奇縁巻之五

東都　曲亭馬琴著編

第九回

壮士　吟詩謝恩
孝子　占夢復讐

熊谷侯文い馬籠の山亭をたづねて出足不信せず路を急ぎ給ひ。八月十六日小氏州深谷といふ孤村より死ぬ。ちかく新鳴村つゞ龍原新堀を経て二里の行程を隔たゝびとかたち深谷の客店小宿をのとめ。次の日彩雲小ゝりて階小石見太郎ゞ所在をたゞ移向とゝくども。渠ゞ所ゝ谷を更形を変ずるをゆく文小知えのなり。まもなく西三日高郡熊谷の辺を徘徊して仇人を探索小ゝ尋ねその便を得ざ。侯文大工屋をたづねて小実ゝと深谷の客

庵ホ立ちかけるが先ホ一個の行客ありて隣棚ニあり。倭文ハ紙門一重隔て一室ホ引籠ゐとり燈火ニ對て嘆息し。仇人の所在知れざるをうらみ且ホ琴ゥ枕死をあはれみ中巒しとホぞ過ま時を枕として少刻目睡けるが夢中ニ人ありて告て云ゆ仇人の所在ちんざるを歎てけるが遠くそして病志を遂ずして生るとおもへば終ゐ覓ぬ倭文ハ夢裡ホ示現を得て大よろこぶ起ありてなホその事を判斷するホ遠寺の鐘声をきゝホ時ホ隣棚の客声ありホ問ホ待を喰ドて云

一個蒲團一個鍋　荒年不レ怕賊来多一
山前財主三更夜　狗一轟時便打鑼

倭文これを聞てあるく。おの待いるれ去歳ニ市の猟夫の家ホ

憩とゐ。屋柱ホ題せし漫戯の詩あり。おのれを嶮しるの抑仇人そやゝ疑ゐく。窃ホ彼隔の間ゐり闚窺べ。年才二十四五の壯侠蒲団のゑホ夷踞せり。倭文おもをゐく忽地曉ニ市の老翁見ニ人ひそうといひしが。ゆゑの前ゐのあやとゐとうとて已ホ立ちく待を嶮しるの縁故を問締人ゐる附外面ゐり一人来るゐあり。彼ゐ客問ゐくゐく。仇人の侠宜ハ甚麗。彼人ニ大哥ゐゐこゐ。ゐく石見太郎が所在を尋ゐ得たり。渠明日筈田村ハ八幡山ホあるゑ。その路をうぐゐて去ゐをを態谷坂ホ対ゐ。ゐ客ニ告ゐ去ゐゐと又ゐも。今一人を欠ゐをバ猥ホ多を下かゐ。彼人ゐれを笑て沈吟して倭文二人の説話を少て大ニあ中ニ。石見ハこれゐうが為ホ千秋の讐ゐり。渠ホ仇人ゐ人ゐをバ石見を仇人ゐいゐ中と呼つ。猛然と

後隔を却て坐す。二人が中間に坐して、くく。酒肴は遺客の中に
ひそかに小人も出て高かる旅客の。今彼前にありて二隅は話を
べ石見をかく仇とのみ称石見は又及妻は仇人なり。二駅は又
石見が伯の寃ある彼二人声を斉して云石見は我々の為に古
主の仇なり。貴客石見を仇とのみ永不家の郎君のみぞや。
候文いくく。さかもたる近ぐ見ゆる熊谷候文と名告るの古主
なり。二人これを伺うたちまち席を離て頭前していくく。僕が
い先君の家吏と市丹治が顔見ゆて兄を丹蔑といい弟を丹
平といい。遺父丹治往昔江州に有し時。山雞の古恩をのく家公
の命にたがひその夜逃奔して故郷と市村に入りて猶戸正業
とそのち江州の風声をきくに家とへ賊の為に死さるとのひ。

継室初君四分八落に離散しぬひ家兄喜内も白河の山中
に流れ山客に教をしとうけのみ。老父大に怒る。当に舊恩を
報ぜんとせしかども。直に大和を啓行し。幼君の所在をしらざるなり
徒に光陰を空しくり。こゝに兄弟と母に相逢難の中に人と
なる。老父常に兄弟に教て云ふ。久しく慮とありて古主に仕
へあるべき所在をしらざるもの。これまでありて忠義を
思ひ。ことにいう。もるに去る六月六田代度婆未詳家祖を
買んといふ。僕我と五十金を得べきを賣ことのひしが。而
日を経て彼老婆金を携来り。猿猴を買ひて去る。老父その金銭
納なる搭膊をひらきあやまりていくく。この裂れ古里囲の西洋布

ゐして。往昔南蛮山雞を獻じ来たる。これをのく敬の表裝とて。是世に稀なるものゆゑ。この裏を義る人おそくたをの郎君ゐ
らであるべくとされども老婆ゐ猴を買人の年庚相貌を問ば。老婆備細ものを說ゐ旅ゐく老父いゐく發る。その夜僕ゐゐ
話て云ゐ六田は退糧人ゐたをの郎君なるべし。ゐれ熟考るゐ舊年一個の行客両個の婦人を携ゐくゐゐ家ゐ歸ひ六田は知
已ありとゐひしゐゐれゐゐ恨たるとありて中夜その人とを走せる。今日虔婆ゐ說とゐ。形容その人と相肖たり。汝ゐ明日六田ゐ至。
その人いゐく郎君ゐ推べこの金を返錦し兄弟共ゐ仕へく先君の仇を復べしと命を僕ゐ出を笑くそべ交てあとゐる。
明日六田ゐ至んとするその夜老父頻ゐ病く湯茶口ゐへそべ。

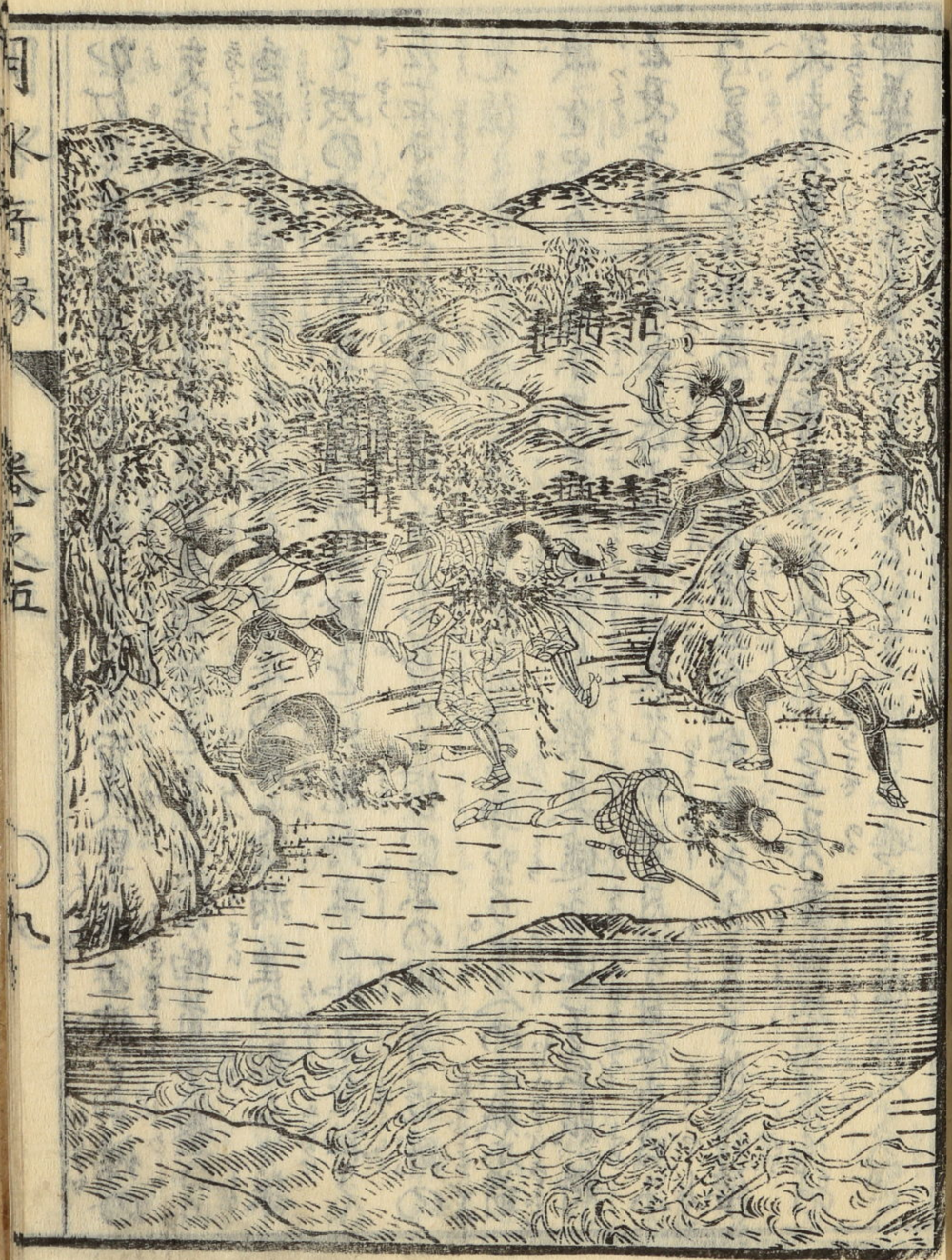
亡日許ゐして身ほろり如兒ゐ哀悼ゐ堪ず交歓をそくのち六
田ゐ死く君を勞ゐ隣人ゐして昨信濃へ行とく起程し
ゐべとゐゐ僕ゐそのゐ遇をゐくゐ直ゐ蹄を暮て信州ゐ到る
とゐゐ岐岨の馬籠ゐして逢ゐ一個の女兒ゐあかの女兒
ゐべくゐ。江戸ゐ遊んとゐゐ民州深谷ゐ行べし。
且ゐ至の仇人を石見ゐ命とゐゐ渠今彩嶋村ゐあり。そべ彼
處ゐゐくゐ石見ゐ所在をきべゐゐ仇人の便宜を得るの日。
かゐゐゐそゐ至ゐ會べしと教ゐ。僕ゐ年をして好ゐゐそのゐ
名を問んとするゐ。忽地その形を消べ。ゐゐ於く神明社御
導ゐゐゐとを曉て。昨夕ゐの地ゐ来りてそべ丹平を彩嶋
村ゐ行く潛ゐ石見ゐ所在を探索ゐ。僕へりゐく郎君を

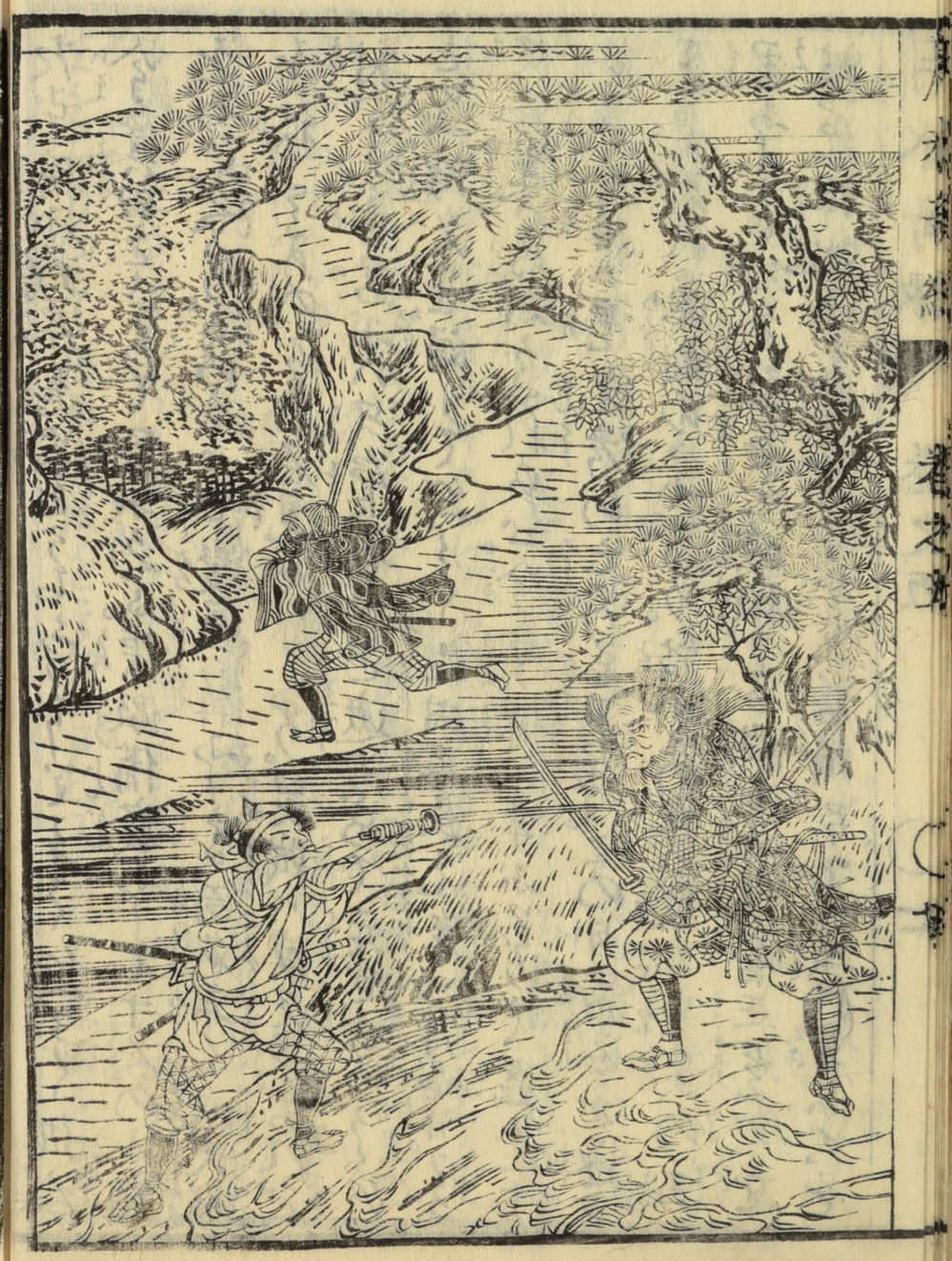
きゞ絲をもつて。きろをども君が腰を足きろねば。主人程ふ題し
ゆゑ。待遇ゆゑ。暗ふ身ぐるとせ。ふ夕果して仇人の所
を去きろ。又幸ふ鄭君ふ遇する。乞ろつゝ神の衛護ふ
ふゝ。こゝと兄弟備細ふ説て丹義皮腰帯より圓金五十塊
を出して。ふを侠文ふ返し。ゆゑ侠文情由を聞く長嘆し
中途兄弟を道たることのいと毒ふ怒りが幽魂ふ。こゝとのひて
和尚神女が吉郎川ふ投しと及ふ怒りふ幽魂ふ會て玄丘の
境を得たりしと一五一十説話ば。丹義丹平或い怒或い猛犯
るいゝく。祖娘ふ數年六回ふ居ゆしを。在父阪沢の間ふ
在ゆゑきろふを去きゞ。是慶く家ふのゝ竜居し故ふりと野ふ
これを後悔て侠文嚴然と云我国ふ性ふ金を辟とられ你

の家れ称猴を得て疫疾ふ地ふ愈たり。豈五十金を惜んや
ふきろゝ。納ふと婦ふ金を乞しけども兄弟ふこれを
受ずていゝく。僕ふ切なゆゑ。ふ強てこしゆゑこのところ辭去ずといざ。侠文曰何
ゆくふを取ゝ云若書ふ實ふ天下の義夫なり。ゆゑくて
の意ふきゞふゝ。他日ふられり志を得ば十倍してこれを報ん。
夫易ふ云二人心を同ふれば。その利金を斷とふを二人ふを
同して事をなせば。利順なゞとのふとゆく。石の堅をもよく
破金の堅をもよく斷をいふられ今ふ右れ翼を得たり。こゝと
ふゝ丹治が誠忠ふふることゆゑ。ふ兄弟を賞しゝ
その夜主従仇人を討ず。祖渠を定め。明日早天ふ丹平を

彩為村ゝ行て仇人の信を聞定させ。今夜熊谷坡ゝ於て
ゝを対づ〜〜と已ゝの准備をなすこの日ゝ裏布を
買てゝを裁縫させ。丹義兄弟ハ猶戸を業として常ゝ竹
槍をつくり得たりなをべ潜ゝ市中ゝ出く鏢槍を買来る。過
年ゝ成りて傳文ハ丹義を将て客店をゝ出既ゝ熊谷ゝ
ゝるゝ。ゝ黄昏ゝ成ゝ成ける。客店の男女ゝの事をゝ。
この光景をゝく大ゝ事めり。抑武義図熊谷坡ハ東西四里の
曠野ゝ〜〜る田畝南北ゝ連廬落五土ゝ隔て。彩樹籠客を
等て石滝馬蹄を浸をゝ〜をゝく夜ハ人迹をゝて彩李
も過るとゝ。かゝく傳文ハ丹義ゝもゝ吹上村の樹下に
坐をゝ居りゝる丹平ゝ伝をゝゝゝゝ日已ゝゝて東西をゝ

たゞ。時ゝ丹平蕉史をゝ〜〜ゝく。仇人
今箕田をゝて家ゝ成ゝ。渠儆備厳ゝて十人の小賊
をゝ〜〜ゝ。ゝのゝ白髪長髯ゝ面色赤く皂衣服
を被ゝるゝこを石見を郎ゝ。衆賊ハ僕兄弟ゝれを
対づ〜。郎君ゝハ只管石見を遮ゝめて走せゝ〜〜ゝ
とゝ。傳文崔蒲〜ゝ〜〜。性ゝ正長元年八月晦日。ゝ
ハ石見ゝ成ゝれゝ。今享徳二年ゝ成りて茲ゝ二十
六年。今日ハ是洗考の亡月忌日ゝ。この日窮志を遂る
王皇天ゝ慈報ゝ成ゝ。特ゝこの地ハ熊谷亜実の古
里ゝ〜〜る坡を熊谷と唱ゝ。ゝ姓も又熊谷正長仇を
対づ〜ゝ禅端ゝ〜〜。ゝゝゝゝゝ准備せゝと坡ゝ草ゝ火を





かけて箭尖とり。三人身みづから暴布此單衣を被て一條の
文法帯を後に足よ紬套袴を穿て紅帽首を盤り。
左後已ゐ裝束しつゝ暗令を定め。倭文い羽隼の敏を採
て坂の中央ゐ立ば。丹義ハ鎗を引提丹平ハ朴刀を和く
左右ゐ走るゞ乙来遅とうち居り。附ゐ東の坂ゝ提燈の
光隠ゝとして来るゝあり。是石見を即なり。十人の小賊ゐ前
後をかこうて既ゐ面前ゐ近づけハ。倭文途を遮て云賊魁
石見を即ゝぶ云を笑。往昔正長元年今月今日汝ゞ為ゐ
うゝ乙たる永禁ゐ近ゞ児源五郎。今姓氏を更て態名倭
文と名告ゆり。近曽汝ゞ為ゐ死したるゝ妻子琴ゞ苦節の
郷導ゐよりゝるゝ侯を乙ゝ。汝已ゐ逃ゝゐ倭ゐ死ゝを

をもゝぶ速ゐ捕獲せゝとしゐ石見その多勢あるゝを侮て
冷笑て云。横口獨孩ゝを乙ゝ仇とをるハ蟷螂の鉄車ゐむ
乙。箕の出れ尖ゐ多ゐ乙ゝ。既ゐ足利将軍とゝ乙ゝもゝれを伝聞
とあらゞ。汝身の分限をもゝぶ。乗りて虎髯をむんゝて。あれ首
を刎よと下知ゝを乙ゝ。石見ゞ傷ゐありゝる海道三腰刀を接て切
てゝるを。丹義殺をゝゝ遂たゝゐ農賊ゐ乙ゝ三人を
ゝり囲潰ゝと。概戦ハ丹平右ゐ當左ゐ柱直ゐ小賊三人を砍伏
たり。倭文ハ石見と戦ゝ十餘合ゐしてゝゝゝ傷夏を決せゞ。この
時箭尖既ゐ滅て四面暗夜となりけゝ。農皆刀の内をもゝ
ゝ使ゐ空を切賊徒交撃して傷ゝの如ゝりける。附ゐ坂の西
辺ゐ数百の松明俄頃ゐ爆と連本。人東西ゐ徘徊して暗ゐ夜

戦をたたかふ。丹義い火の光ふつ〳〵ふる〳〵海道二と戦ひ遂ふ槍をとり伸て海道二を刺さろとところふ。夜又五郎走りきて丹義をさそんと。丹義忙しく迯戦んとして怪て坡を踏そんじ。水田の中ふ落陰。夜又五郎ふを見〳〵坡を飛て丹義を砕んとすると。丹義平たをけ来〳〵夜又郎を見一刀ふ砕ろし。槍れ筆を舎てまへふ引ば。丹義槍を携て水田ふ立出るふ。全身漬淖とありて恰田荒れ漕渠を渉ふ似〳〵。ちくよおくるを丹義倭文がをを同ば丹義平〳〵〳〵。鄙ふ火の滅るとれ郎君を見うーあり。丹義ちよ驚て姫ちび坡ふ上て。兄第西を見〳〵そもを見れり。彩て倭文い彩樹下ふあて石見とたゝふ上五十郎合附ふ倭文恨て。路上の石ふ跡。たちはちち撲地と仆れば。石見走り刀を揚て切んとをるを。倭文仆あるゝその足を切〳〵〳〵ば。石見刀ふちくぶるる鍔と跡を倭文身を刺るゞ〜て起あり。肩尖よるを脇をクけ切て西脇とあれ。石見い常ふ鍵縁衣を被る。敵を防ぐの准備とちゝが。今倭文が一刀ふ両脇とあるを。羽織の宝剣はあるをべいりでその堅を破ざれ。倭文をあわち石見が首をとりて立あれば。丹義兄第中井のかゝちゝ来ることの光景を見〳〵ちふよろこぶ。主従逸ふその悪を視〜けり。この附小賊ふをぐ〳〵対少て〳〵市ふ敵るとのありければ。倭文仇人の袖を断離てその首を畏て逸ふ三人西を望ゝ走去けり。

第十回

陰陽和合　熊谷坡
剣鏡奇遇　馬籠巓

斬くて倭文は丹義丹平をとるもふ路をとることと里許已ふ熊谷寺の邊ふ至るまろ。夜は尚二更の左側ふて。一軒の酒樓店ふ一個の方燈を挂て清梵貧食の文字を記し。又別ふ両個の招牌を掲出しくるの聯句を錄したり。倭文首を回して之を視るべ。

有酒如線遇レ酣則見
有餅如月遇レ食則缺

とぞ書たりける。是とかつて楊大年と丁公の聯句あり。倭文これを續て。この店酒を賣餅を鬻ことをきりけるべ。之人身を薄して裡面よりまた入るべ。婦宅の男女。倭文ふ衣服の血ふ染るふあるを怪ふ怕色裏皆外面ふ逃去ける。丹義ふを又く呵くと笑ひ渠等吾俑の美形あるふあるを賊なりとおもひつくん島君も定らず飢ふ

そめ。丹平酒をもち来ることいくそばく地焼ふ紫を新たふ湯ふる衣服を乾せぞ。丹平酒を喉て倭文ふ之を見ると又胞まるく懸て。倭文ふ性酒を嗜ざりけるべ。家を更んとて肉房ふ約て見るふ前面ふ庭あり。蕉葉破るく紙窓穿くく閻蛩集て莎庭ふ。時ふ疎林の中ふ鈴磬の聲ふ響ふ。貴ふ響絃の声なり。倭文おもふく前面の蘭若は熊谷寺ふあるべ。往昔文治年間熊谷直実久下直方と封彊論して浮世を觀し。名利を脱離して身を釋門ふ投じ。終ふこの寺を創むとやあるひは蓮生は字淨宮ふ之郎入道なりとふ説あるべ。寺説ふよるべ蓮生は直実なりとと亡語ふ懐古ふ閑情をうあるて庭上を徘徊しおるべ。数十歩とくく行べ。この所熊谷寺は墓門は通ぞ。紀墓ふをつくる。

拂を埋む。石麟石を累ねて驚を成る。さてよりて頓ふ父母
玉琴がことをおもひおこる千年の偏樂すでにあるつぶさ石
佛を拂ひていはく。父母これを生といへども孝をうけ人の日ふく。
玉琴うれと苦辛を共ふして歡樂を共にせずと。夫死亡い老少を
論ずることあるべからず。從千年幾門の限ありとも。終に一個の土饅頭と
なることこれ彩のごとくと身をうちて望筆をるが。豹脚蚊を
さのふ身を刺れいへ。地さいろつぶくと立くんとする附隨くと
て白光目ふ遮る。あややと熟視び。一個の女子縞素夾吸を被て
飄ことを来るなりけり。只烏暗ひて伺人ありてを去て近くなる
ふ。ふおれそどて交面ををべ見乞妻玉琴あり。倭文長悼ふ堪ぞ。
ふ妻なるどくく下上ふてうつぶでなふ。只宛ふ遂来るうれ今文

石見を郎を対て病志を遂ふう。今い怨もあくど。只速ふ天界
ふ生ぶ史とのひつも口中頻ふ仏名を唱ふ。玉琴い良人の声を
ぶうも身を石塔ふ倚て只管涙よむをけどび。倭文いふ悲る
遂ふ一巻の提婆品を誦て実選して玉琴のつくく。郎ふ別
ーふ前面なる酒僕ふ来ふく。酒妓とあり。酒客れ席ふ備れく
憂をつひなる生ふ。ふろ身れ玉いふふ足て只郎が幸おば
つふふ。遂ふふうぶ病ふふぬこの精舎い蓮生法師基を寂記
ー霊場とぶい病苦を忍て夜くく仏ふ系ー。花をさげ香を進
郎が疫疾平愈ーて病志を遂ふんとを行をりー結願のく文
おあふう。郎ふ眼病疾愈る九人を対ひ。ふくくもめぐり會ー
嬉さるをとくへをりくく下里人とーふ。郎がふふふ秋くふ

く身を脱蟬の容氣ありやといとうるみて笑ひ。倭文さらふ曉得ぞ
してらくく。是岐岨の馬籠ゆゑて抵目你の幽魂と結を接し。
玉立の鏡を拾得て仇人の所在をきる。紀念の短冊ありあり。旦ころ
僕丹義丹平といふもの伯の鄉導を得てこれを會ふ豈世間二
人の玉琴ありしその幽魂ありこれ狐狸ばかりを魅ものなるべ
しと疑ひを抱て決せるとあるさわぐ琴ふをを笑てあり
ぞ家穂と生冷氣していらく。ころハ六月六日より轎子ふ乘て
中途爰ともころを一個の差慕来まるく云。海馬籠ふ到るべ
性命危しとしてもふ来ぜといふく轎ふより出ずまを携らく
約とらくいこの地ふ来ぜり。いそぐ掌馬籠ふ到りてをーとふ。
倭文さらく。ころ疑ひ。ころふ来を論ずるの地ふあるぞ。これとも

ふまるべしと夫妻酒樓ふ立くるこの時丹義丹平ハ酒盃
飲て居らしが。剣倭文ぐ見えざるをあやしけるところふ。倭文ハ
玉琴を得くころ妻をこころ〳〵前事を説ばハ兄弟ありをゆて
伝ず疑し。さふ見ずを表ぜるとあるぞ。倭文疑ふ思ぞ
慌〳〵懷包紙を取出馬籠ふ〳〵得たり〳〵短冊をアるふ。
これ紀白袋ふ〳〵書〳〵妹ふの名を背面ふ尚存れい。
ふくよ〳〵そ〳〵晓ていらく。ころ夫妻危疑ふあること數回
ころとなりぞ。既ふ今貴仇人を討の時間
疲たるを得ざり〳〵ふ四下ふ鬼火をあるを祐く。是全く
神明のこれを祐ふるべしとい農皆皇天の恵報ずを
感激ず。この時酒家の主人ハ紀ころ家ふのこり出り。厨下ふ入れ

居たりしが。四人の説話を聞て。鈍くと這出ていふやう。小人ハこ
の主人なり。却も去る六月一個の老翁この婦人を将て来り云。
この女児琴道を善くす。ねがはく汝が家にとゞめよ。八月晦日に至
らバその夫来りて迎へん。その嫡夫に久しくとゞめよといひつゝ去りぬ。されバ小人
それが娘ともなしといへども為何なく。さらばうち家に留む。今又果て
その言れし如く。語る所の事符合せるぞふしぎなる。倭文子ハ神の
祐とて感佩しうちいでていふ。これハ極秋意忠の家士熊谷
倭文といふものなり。今夜熊谷披に殺せし父の仇石見を射
てり。この石見ハ賊群中しるゝ官にも探索あれと聞。他日知縁の
かたきを同べ姓名を通ずべし。荊妻まで。你が難に遭ふ。
是又一奇縁なり。吾们これより江州におもむけぞ。今夜ハ此家に

宿るべし。是聊荊婦が病中の給用を謝するなりと圓金二
十魂とり出して与けれバ。主人大によろこび家族をよび来て
饌に酒食を設け。萬方四人を饗應けり。暁るに及て倭文夫妻ハ
剋目睡るに。一個の美人頭に妙常冠を戴き身に久穀の
華袿を被て蛾眉人を移し蓮歩馥郁として夫妻の枕上
に立ち鶯音をもらしていふやう。これハ是志賀山中に千年を
経る白狐なり。往時正長元年つが二千五百の眷屬ことく和平
にたすけらるゝことを一方ならず。澤枯の恩を謝せんとおもふ。いかにせ
ん和平ハ隠慝の奸賊にして福を降ぐるなし。さてそのかくこれ暗
に你およびが衛護神となりてその危難を救ふこと数回。郷に老翁
と変じて女琴をこの地に送りしハこれ夫婦なり。これ又縦に

玉琴とあり。石見ゞ為よ教えたりとえせく彼を追ふ。又その梅魂と変じて你よ明鏡を授て仇人の所立を告ゝセ。或い丹義丹平が郷導とあり。あるひい暗夜よ火を奉て雖云を射のたゝしのとせう。倭文美理ふ向ていのく。白狐ゝ夫妻を語りて危難を救ゆるとゝ感ゞるふ感ゝり。只ゝ玄五の鏡ハその徳妖魔を鎖鎖ゝ。ゝるふ明鏡宝劔ふ鱗るとゝ。ともその本身をあゝゞるとゝ甚白狐云愚弟九劍鏡を怕るゝのハ鬼魅野狐の屬ゝ。千歳年を経る己ふ神通を得ゝう。何ぞや明鏡を怕つ。往古金華神劍と鏡をおそれゞ。その事宋人ふ説あるいう。或い捜神紀ふ載るゝゝ千年の老狐。張義先ゝ。或い太平廣記ふ説と

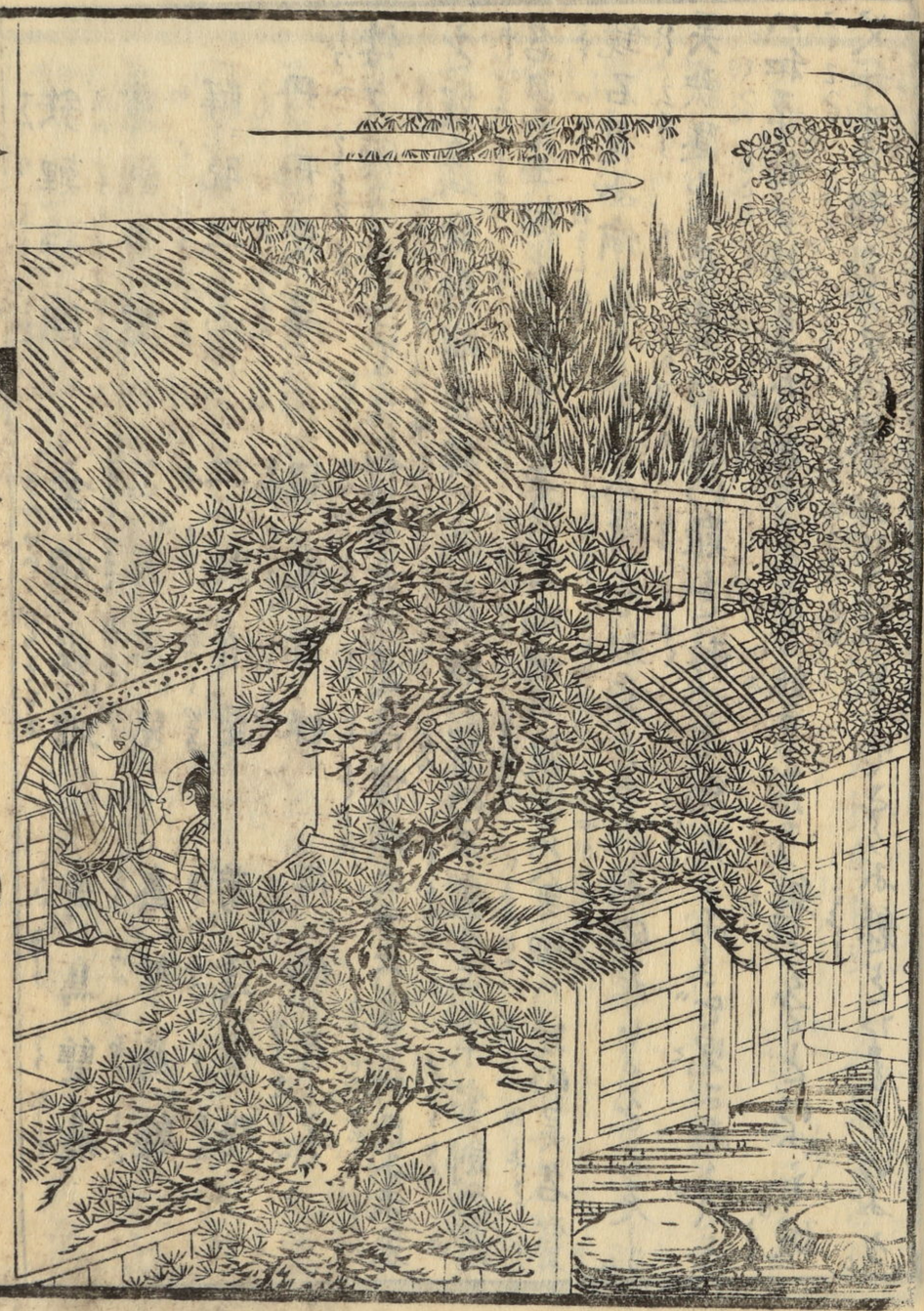
ゝの老狸董仲舒を試なゞ。ゝ。ゝゝゝふ人間ふ禍ゝる妖精なりとゝゝゞ。ゝ劍鏡を懼ゞ。聞ゞや本朝一條帝の在位。靈狐宗近をたゝけく雄劍を佩て。遂ふ三條切張沼の号をゞむ。ゝ擬ゞ馬籠の山亭ふ来ゝく。楊柳下をゝゝゝとゝく。忽地金光をゝゝ西をさゝてゞ飛去ける。ゝゝと南柯の一夢ゝり。夫妻覚ゝのち丹義兄弟ふ説話ゞ。二人ゝく靈狐の神通を嘆美せゝ。この所既ふ夜向明とゝゝ。四人遂ふ酒家をゝゝ玉路をゝゝゝゝ数日。九月九日馬籠の山亭をゝて楊柳下をゝゝ。鬱ふ倭文が拝さゝ。菊おのゝゝ根を生ゞ。数莖の蘭菊爛熳と咲ゝゞ。樹下ふ一ゝの穴ありけるゝ。白狐たゝゝゝ穴口ふあゝゝ出再

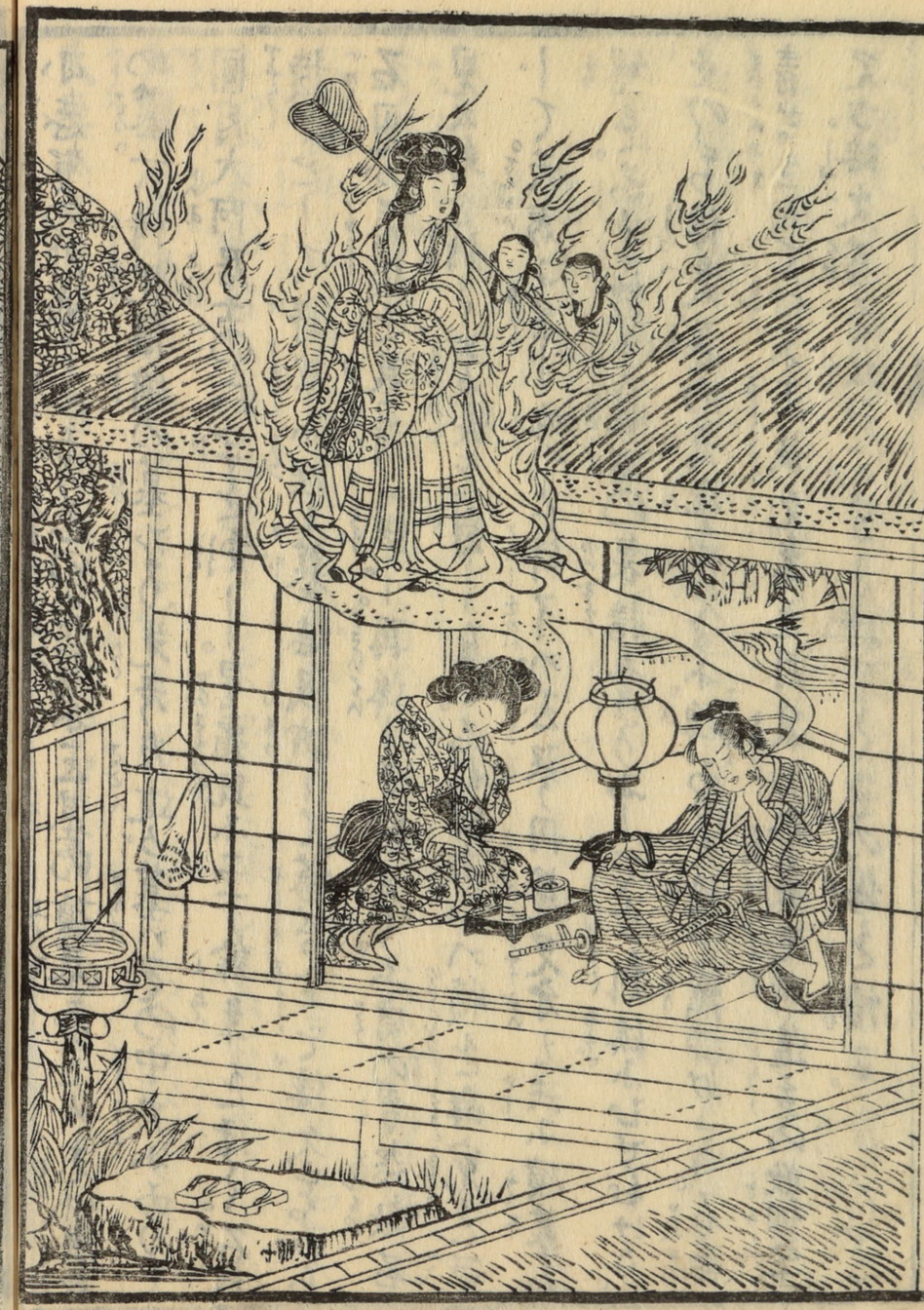
三倭文字をかりそめに。ふるこぶ完ふ匿てゝゝえど。衆皆これを
ゝゝ感涙をとゞめうゝ。さるかつら樹下ふ額洋て美狐れ
翁徳を謝し。遂ふ山亭を出去る。後人霊狐を贊る
句あり。要を摘らゆさるふ紀て

完居知雨　　狗弁若神
謝二人流栗一　　稱二道紅仁一

今妻籠の東野頭兜観音の間ふ和合といふ村あり。倭文
この地ふて殺人を散じ。夫妻ふゝゝ和合せしより名く
といふ又和合ふ酒店ありて呉酒を醸せ。その名高し。芝
五琴一且酒家ふ身をゝゝる波なりといり。折て倭文
夫妻ハ九月十三日江州志賀ふ居り。考妣の墓をゝゝぬる

小志賀の外城ふ山あり山の半腹ふ二基の墳墓あり一ハ先妣唐衣
の墓。一ハ侍児連倚の墓なり。先考ハ近ゞ墓いその中央ふありて
圓月大阿居士の六字を刻し。星霜既ふ二十餘年を経く。石ハ
稜々として野草ふ埋ゝ墓結泯滅して海苔生ず。倭文をふちち
石見が首級を墓前ふ供じ。再洋ていりく。ふ月の男怨歇石
見太郎を討ゝ冥を慰しなる。ふ祢ゞゝハ憤を解。冤を散
じて天界ふ生じ。ゆくへと洋ふハ。五琴丹光兄弟も共ふ墳墓ふ
縋そ。ゝゝ終ゝ懐古の哀情堪ふて少刻涙ふむせびけり。
その後倭文墓の左辺をつくるふ碑あり。て傷を撫つけゝり。石面
青苔生じて僅ふ正長元年九月某日拈華老師遺立の数個字
ゝ。倭文苔を払ひ文字を榜ゝくその傷を讀よ。





鉄鯉解湖　金烟没地　奇鳥雙飛
霊獣走隧　不夫不兒　爲讐爲魅
解脱二凶　二物自至　菊逢二重陽
丹丹是華　須見因縁　件件存字

倭文讀て云拍華老師道高博識二十六年前已ふ未来を説ふ。鉄鯉湖を辞して、鉄鯉ハ晋の王文が古事。宝剣の異名。昆室剣家を去る。金烟地ふ没とハ金烟ハ鏡の異名。鏡石見ふ偷去るをいふ。奇鳥双飛とハ山雞の死るを云へり。昊獣隧を走とハ白狐の難を救ふを説。夫ふあらぶ児ふあらぶと。ハ和平祖女及ふ夫妻のことふ。讐となり魅となるとハ。倭文和平ハ却ふ死ふ父の讐ふ琴ふ死ぶてさゝふ魅となるをいふ。

二凶を解脱して二物ものづゝ至とハ和平自双ー。石見首を授て。猟と剣とふて合ことを無示ことを菊ハ重陽ふ逢て丹丹ことを華とハ。ふれ後ふ馬籠を過うしハ九月九日ふて。丹丹平ぶ奇遇を説ふ。昆をのぶ。おりふふ。ふこぶこの狐を羽雀と号く。羽雀ハ白ふ翟なり。又猟を丟丘と呼ぶ。宜室志ふ狐一名ハ玄丘校尉。ふ。ふ。ふ玄丘ハ狐なり。老師剣と鏡と狐と翟の四種をりく。ふぶ生涯の吉凶禍福を論じふなめりと仔細ふ偈のゝろを説ふめゝ衆皆因果の免ぶこを暁て。老師の權智无量の方便を嘆美せり。この消伝ふ本高負朝臣ハ壽算既ふ八旬ふあまぶ志賀の屈城ふ居ふひけるハ。倭文冒ふ登て石見太郎を討しことを説ふ高負ふことびて算ふ。石見ハ賊魅ふてされら

天下の罪人多り。宜く命令を以て大津に申明亭を立てしむべし。この日高負倭文を召して宣し。汝が父兄近いころ氏族たり。汝今ようやく仕ふ。倭文謹んで曰く。臣いとけなくして植枝憲忠に仕へ恩ふかく雖云を復のがれ一まづ辱仕へんと約せり。ときに命ぜらるる命ぜらるる。後年の児を奉ぜ。君が馬前の卒となりて舊恩を謝し。ずんぬ義を感じて留めらるべきなり。と言ひ終れば。高負その純孝を賞し。倭文恩惠を拜謝し。遂に玉製丹瓶を以て鎌倉ふくりる。時に管領成氏質弱多病にして總州古河に隱居し。植枝武部少輔房顕及植枝治部大輔持朝に管領をあづけ。ゆふ。ときを扇谷山内の二家と号し。関東の両官領と称して。

倭文は鎌倉ふくりて憲忠の後室に洛渭し。ぬくまで房顕に仕へ。房顕その城忠を孝を賞して老臣に列に加へ。ときに倭文極楽寺に父母及和平祖母が墳墓を築き。又茅屋中に靈祠の叢祠を造り春秋二季に祭を紀る。今は金龍山に熊谷稲荷と称する神社あり。亦浅草本法寺（長章山日蓮宗）も同名の神社あり。後人ひとりこの白狐を祀りの秋その子五琴三男二女を生り。倭文誓約よろこんで。家子を伝へ永家の臣と為し。永原左近と名告。この人後年に名あり室町家の寵遇を得取用せられ越前守に任じ。江州野洲郡永原の城に居住せ。ひとりとして永原熊谷の両家振ひて富貴を係嗣ふつて四海に奉ずして五穀

豐登萬民泰平をたのしけるとあん。待あり證とて。

誠忠賠二濁世一　巨孝奉二家艱一

銳志雪レ寃日　史生記莫レ刪

簑笠隱居硯不呵ー。案を拊し。譯ーて云盜跖孔子ふ戮と。

王莽周公ふ比て。邪智の鬼神ふ迫り梟雄ハ世ふ横行する君子

大人ふ迫れと辱をあらつど。夫隱慝禍媒の冨一旦身を利する

とゝども。天網終ふのがれとあ。た近ハ元忠良の士恨て一婢

を教て。その餘殃をあらぶ速石見ハ乾匿の賊財を偷ム人を

害て天誅のがれとも遲ー。嗚乎ものを是とせんや。彼を非と

せんや。天の人を罰する時ありてうあるべきとあ。冊を

ちくけ童蒙をづく勸懲とせよ白居易讀史ハ他あり

かさねて證とて。

周公恐懼流言日　王莽謙恭下レ士時

若使二當年身便死　至レ今真僞有二誰知一

月氷奇縁卷之五畢

傳曰怨耦曰仇嘉耦曰耦未曰有奇耦奇耦所謂奇緣也友人馬琴翁所述月氷奇緣其言愈奇而愈高文章巧猶當其時鰥其事爛錦心燦繡口鮮葩競發秀蕚怒生自古恍惚恠異之事何所不有齊諧之言不可誣也月氷者取諸月下翁暨氷人復撮合瑤劍之光及菱花之明以辯妖孤山鷄之事說人所疑惑陳奇緣所繇生要皆感激之所致而醒蒙昧之耳目欲使觀者津津焉感興也夫惡棍逞姦種種謀事情子不意中陷險艱萬苦千辛豈非花時之風雨乎可惡甚者也琴翁所以作此編其言則足利公制宇內拔權勢其時有覬覦之臣群邪之盜誣誠忠賊貞操當時不諱以傳之癸亥春某叟來茶談及之云遂耳熟不日作之琴翁自髫歲即著神彩之稱於四方駸駸耐菴施氏之遺響矣余因叙所以爲月氷奇緣庶幾俗士愚婦著意以觀之則爲勸懲之一助云爾

江戸　東秋風譔

曲亭先生姓瀧澤名解字瑣吉一號著
作堂戲號馬琴家于東都飯顆山前交
友呼爲蓑笠隱居蓋先生每屬文托諧
警悟雅蒙雖不坐作聲價世人飲香名
尚矣真滑稽之雄也小人得其所述月
氷奇緣五卷以雕刊凡四方賜顧君子
認印號爲記冀不至悞
浪華書肆　文金堂森本太助欽白

蓑笠雨談

著作堂馬琴子著　近刻
全部五卷　奇談俗人國字ようさ

文化二乙丑歳孟春

發行書肆

江戸本町通油町　蔦屋重三郎
尾州名古屋本町　永樂屋東四郎
京三条通御幸町　蓍屋儀兵衛
大坂心斎橋北詰　播磨屋五兵衛
同心斎橋通唐物町　河内屋太助